

妊娠女性の出生体重と妊娠糖尿病との関係

Tagami et al. Maternal birth weight as an indicator of early and late gestational diabetes mellitus: The Japan Environment and Children's Study. *J Diabetes Investig.* 2023. doi:[10.1111/jdi.14159](https://doi.org/10.1111/jdi.14159).



【はじめに】

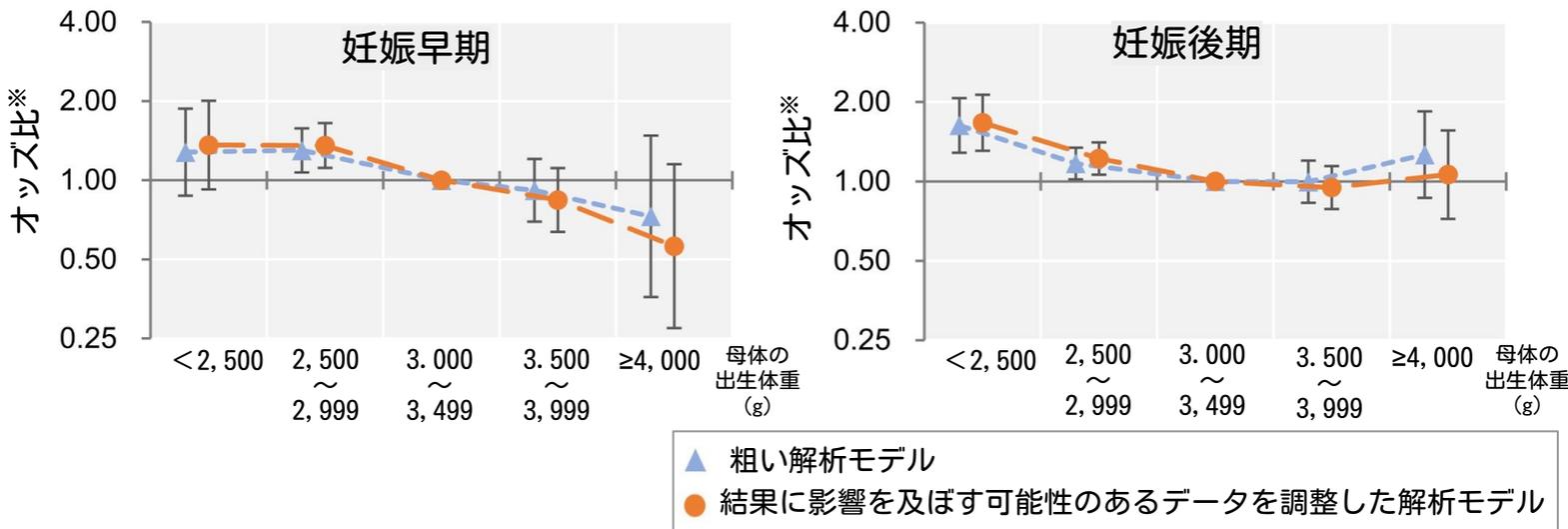
妊娠糖尿病は、早産や難産など周産期のリスクの増加、生まれた子の糖代謝障害や肥満リスクの増加につながる妊娠合併症です。国内で低出生体重児(2,500g未満)の割合が増加する中、低出生体重が妊娠糖尿病の危険因子であることが指摘されています。そこで本研究では、母体の出生体重と妊娠糖尿病との関連性を調査しました。

【調査項目】

初産か経産か、また単胎妊娠か多胎妊娠かの区別なく、27,775名の母親を対象としました。母体の出生体重を、<2,500 g、2,500~2,999 g、3,000~3,499 g、3,500~3,999 g、≥4,000gの5つに分類し、各分類において妊娠早期(妊娠24未満)と後期(妊娠24週以上)で妊娠糖尿病と診断された人数のデータを用いて、母体の出生体重と妊娠糖尿病との関連性を解析しました。

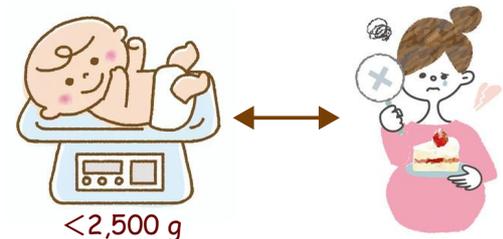
【結果】

母体の出生体重と妊娠早期および後期の糖尿病との関連性



※オッズ比:ある事象の起こりやすさを算出した数値で、値が大きいほど起こりやすいことを意味します。このグラフでは、母体の出生体重3,000~3,499 gの妊娠糖尿病の起こりやすさを1とした時のオッズ比を示しています。

母体出生体重が低いことは、妊娠早期および妊娠後期の糖尿病発症オッズの上昇と関連していました。また、母体の出生体重が2,500g未満の場合、妊娠早期に比べて妊娠後期の方が、妊娠前期糖尿病との関連がより強い傾向がありました。



【この調査でわかったこと】

母体の出生体重が低いことは、妊娠糖尿病の早期および後期発症リスクの上昇と関連していました。したがって、母体の出生体重に関する情報は、妊娠糖尿病が発症した妊娠週数に関わらず、妊娠糖尿病のリスクが高い妊婦を特定する上で有用であると考えられます。